

例えば、近所にこんな方がいませんか？

Aさんが以前から気になっている近所のBさんは50歳代でひきこもりがち。たまに、Bさんの叫び声が家の中から聞こえてくるが、働いている様子もなく、なかなか外にも出てこないため、どのように生活しているか分からない。

『どうにかしなくては…』と思ったAさんは…



- ① どこに相談してよいか分からなかったので、社会福祉協議会に相談してみることにした。社会福祉協議会が民生委員と一緒にBさん宅を訪問してみると、Bさんは認知症の親Cさんと一緒に暮らしていることが分かった。
- ② そこで社会福祉協議会は、地域包括支援センターや障害者基幹相談支援センター、保健師などにも声をかけ、Bさん世帯の対応を検討することにした。BさんやCさんとも話し合った結果、Bさんは民生委員や障害者基幹相談支援センターなどと、Cさんは民生委員や地域包括支援センターなどとつながることができた。
- ③ Aさんは近所の人たちとも話し合い、引き続きBさんやCさんを気にかけて、見守るとともに、同じような人に気づいたら、早めに近所に相談しようということになった。

- ④ Bさん世帯の対応を行った社会福祉協議会などでは、既にBさん世帯のようなケースを何件も対応していたため、専門職が集まって、個人への対応方法だけでなく、地域の課題についても分析、検討することとなった。
- ⑤ その会議から情報提供を受けた校区の役員たちは、Bさん世帯のようなケースが自分たちの校区にも多くあることに危機感を持ち、校区の集まり(支え合い推進会議)で話し合うことにした。
- ⑥ 校区の集まりでは、日頃からの声かけやちょっとした変化への気づきが大切だということになり、重点的に校区で取り組んでいくこととなった。





⑦ そのような校区が増えていることを知った市は、市全体での対策も考える必要があると考え、様々な機関と連携して、その原因の分析や解決方法の検討を行うことにした。

⑧ その結果をもとに、様々な団体と、予防につながる施策の実施や啓発の必要性について考えることとなった。



⑨ 市の方向性などは団体から校区にも伝えられ、校区でも自分たちでどのように取り組んでいくか話し合わせ、支え合いの意識が広がり、支え合いの地域づくりが進んでいる。

⑩ そういった取組から市全域で見守り、声かけが広がりを見せ、Bさん世帯のような世帯も減り、Bさん世帯のようになっても周囲が早目に気づき、支援に繋げることができるようになってきている。

支援力の強化、受援力の醸成をすることが必要
(早期発見、早期対応)

